ZOOM UP ズームアップ

名古屋記念財団
金山クリニック

理事長：太田圭洋
院　長：杉山　敏
施設所在地：〒456-0012
愛知県名古屋市熱田区沢上2-2-14
TEL.052-679-1700
透析ベッド数：80床
http：//www.hospy.or.jp/kanayama/

金山クリニック全景と壁面のHOSPYのロゴ

通路を広くとった透析室

HOSPYグループは新生会、名古屋記念財団の2つの医療法人に属する8つの施設で構成されています。HOSPYはHospitalityとHappyからの造語で患者さんをホスピタリティの心で迎え、患者さんの幸せを考えた医療をめざすグループの理念を表明するものです。

そのグループ内の透析サテライト施設のひとつとして金山クリニックがあります。

今回の取材は、HOSPYグループ全体の透析医療に対する取り組みについて太田圭洋理事長、金山クリニックに関して杉山敏院長をはじめとする主要なスタッフの方々からお話をいただきました。

透析医療の質をより高めていくには どうしたらいいかが永遠の課題

理事長の太田圭洋先生に、理事長の立場で現状のHOSPYグループの透析医療をみた場合のご意見をお聞きしました。現在、HOSPYグループ全体で約1,200名の患者さんの治療にあたっているそうです。

「HOSPYグループ全体をみた場合、その見方には量と質いう面があります。まず量という面では患者さんは増加の傾向にあります。そのためグループ内施設の一部では、施設が手狭になり、患者さんにご不便をおかけしている向きもあります。こうした施設にはそれなりの対応をしていかなくてはならないと考えています」

もうひとつの課題である透析医療の質の問題について、太田先生に現状と今後の展開について、いくつかの切り口で語っていただきました。まず現状についてですが「私たちの施設は長年、透析医療に携わってきたことにより、医療現場にしっかりした透析医療を患者さんに提供していかなくてはならないという意識が育ち、受け継がれて文化ともいえるものになっています。各施設では透析ケアの向上に役立つ各種の取り組みが、自発的になされています。これはありがたいことです」と、HOSPYグループに定着している学びと実践に意欲的な職場風土をあげられました。

「また、透析医療管理のコンピュータ・システムを独自でつくりあげ、2002年から患者さんの各種データを管理、蓄積してきています。このコンピュータ・システムを独自に開発した理由のひとつはデータの加工を容易なものにし、研究成果などの分析がより柔軟な切り口で分析できるようにという判断がありました。8年経過して量的にみても時系列にみても研究のベースになりうると考えています。こうした1,000名を超える患者さんからのデータを生かした取り組みを今後の大きな課題と考えています。

金山クリニック院長として、今年4月に杉山先生をお迎えしたのも、グループ全体として、より研究的な視野や発想を取り込んでゆくきっかけになればと考えています。グループ内の腎臓透析分野の医局会を月例で開催していますが、ここでも共同してある目的に照準を合わせたデータを収集しようという提案もあり、ひとつずつ動き出した感があります」

積極的に研究成果を情報発信し 透析医療の質的向上に貢献する

太田先生は多くの患者さんが透析されている施設として、グループ全体で透析医療の質をあげていかなくてはならないと考えられ、そのためにより臨床研究的な取り組みの必要を感じていると語ってこられました。また、そうした研究成果だけでなく、従来からの透析ケアの向上のための研究成果を、もっと積極的に情報発信していくべきだと考えています。

「これはひとつの反省でもあるのですが、今まで私たちからの情報発信はまだまだ不足していたと思います。透析医療に関するさまざまな取り組みを情報として発信していくことで、透析医療全体の質的向上に貢献していくことも、私たちの使命だと思います」

そうした情報発信には、患者さんおよびその家族の方へHOSPYグループとして、より的確な指標で伝えていくということも含まれます。

「私たちの透析医療の質を患者さんやそのご家族に伝えるにあたり、より的確な指標が必要だと考えます。クリニカルインディケーターといったものになりますが、そうしたものので見ていくと同時に、それを管理して、質の向上につなげたいと考えています」と太田先生は結ばれました。

このようにHOSPYグループの透析医療全体の質を上げる活動は、情報発信をキーに今新たな段階に入りつつあるようです。

太田圭洋 先生

名古屋記念財団 金山クリニック

杉山先生とスタッフの皆さん

研究成果の情報発信と指標による施設評価

院長に就任して2ヵ月の杉山敏先生に、HOSPYグループや金山クリニックについて感じていることをお尋ねしました。杉山先生は「HOSPYグループは、透析医療に携わって30年の歴史があり、その歴史のなかで出来上がったものがあります。私としては、こちらに来て何かを新しくするというよりは、何か必要なものを加えていければと思っています」と現在の心境を語られました。

杉山先生はこうした考え方に基づき今後の展開について、いくつかの切り口を考えています。そのひとつは研究とその情報発信です。「金山クリニックの透析患者さんの数は200名になりますし、HOSPYグループ全体では約1,200名になります。これだけの患者さんがいれば、大学の研究とは異なる面の臨床研究ができます。日本透析医学会でもたくさんの発表がありますが、観察研究が主体になるため、研究成果はエビデンスとして評価されづらいところがあります。現在、ガイドラインとされていることにも経験知や他の報告から決められていることも多数あります。こうしたテーマに取り組むことで、エビデンスとして残る研究成果を発信できると考えています」

「現状では、透析患者さんは施設を一度決めると、大部分はその施設から転院することがないのが実情です。しかし今後は、患者さんやその家族の方々が透析施設を積極的に選択する時代になると思われます。そのためには患者さんやその家族の方々が医療の質を評価することができるように、透析施設が医療内容を分かり易く公表していく必要があります」と杉山先生は語られた。他の施設の医療とどこが異なるかを、患者さんの治療の評価になるようないくつかの指標（クリニカルインディケーター）を出して公表できるようにしたいと考えているそうです。

杉山　敏 院長先生

このように、杉山先生はエビデンスとして評価されるような治療研究と情報発信、透析施設としての評価をしてもらえるような指標の発表の2つを、今後の大きなテーマと考えています。

透析医療の今後に思うこと 実現を考えている長時間透析

杉山先生に透析医療の今後や金山クリニックで取り組んでいきたいことについて、お話しいただきました。

「透析医療は40年から50年の歴史がありますが、まだまだ潜在的可能性のある治療法です。透析医療（血液浄化療法）の基本は体内から不要物を取り除くことです。アルツハイマーの発症原因物質の除去が透析によって可能という発想もあります。これはひとつの例ですが、探していけば未知の領域が広がる可能性のある療法だと考えています」

これは透析医療の将来についての展望ですが、杉山先生が現在関心のあるのが長時間透析です。週3回で1回4時間というかたちで透析の時間は定着していますが、時間を延長することによる効果が注目されています。長い透析時間が合併症の発症や循環器系の予後に関係があると考えられています。「今の4時間の透析で回っている患者さんの生活とどう折り合いを付けるかが問題です。昼間の時間帯に来ている男性の患者さんは、比較的時間を延ばせる可能性がありますが、主婦の方だと家事がありますから難しい面もあります。それぞれの患者さんに事情がありますから、効果があるからというだけで勧められないのですが、条件の合う患者さんから取り組んでいきたいと考えています」

患者さん同士の交流で生きがいのある生活を

杉山先生が金山クリニックに就任して気になったことは、維持透析の現場が自分の知っていた状態とずいぶん変わったということでした。透析さえしていれば、ほとんど通常の健康人と同じような生活が可能だった患者さんの多かった時代に比べ、患者さんの高齢化が進み、高齢になってからの透析導入の方が増えたことです。「透析のためクリニックに来院する以外にやることのない方や一人暮らしの方を見ていると、こうした方に少しでも生きがいを持ってほしいと思います。こうした方のために何かできることはないかと考えています」。杉山先生は患者さん同士の交流を活発にすることで、何かが変わってこないかと考えています。「いろいろな経歴の方がいらっしゃるので趣味を教え合うとか、一人暮らしの方のお宅を訪問するとか、ここは患者会がしっかりしているので、一緒になって何かできることから取り組んでいければと思っています」と話を結ばれました。

C O M M E N T

金山クリニックの主なスタッフの方々から、日ごろ医療に携わるなかで、心がけていることや考えていることを聞かせていただきました。また金山クリニックには5つの委員会といくつかのプロジェクトがあり、透析医療の現場からの発想でさまざまな取り組みがなされています。そうした取り組みのいくつかにも触れていただきました。

COMMENT

辛いこと苦しいことを楽しいことに

専任師長
江崎　眞知子 さん

「私は今年の4月から専任師長という立場になりました。これは役職退任制度に基づいて、60歳の定年までの1年間、新任の師長さんを支援したり、一緒に問題解決に当ったりするのが役割です。

金山クリニック看護部の特徴として、通常の透析室業務以外の委員会活動やプロジェクトの活動に、スタッフがとても熱心なことです。委員会活動は、スタッフ全員が5つの委員会に所属し、業務時間内に活動します。プロジェクトは、興味や関心のあるテーマに有志が集まって、学び、実践し、成果を研究として発表しています。現在は、高齢者・フットケア・看護記録のプロジェクトが活動しています。

プロジェクトの活動に必要な知識・技術を求めて、自分の時間とお金を費やして、遠くまで出かけていくといった頼もしいスタッフが大勢います。そこで得られた知識・技術を、日常業務の中に浸透させるために、宣教師のようにがんばってくれています。そして、そこにやりがいや楽しみを見出しています。金山クリニックは、このようなスタッフに支えられているのですが、私もこうした職場風土づくりに少しはお役に立てたかなと思っています」

管理の仕事は思ったより書類が多い

看護師長
平嶋　由美子 さん

「師長を引き継いで2ヵ月ですから、自分のオリジナルなものを出せる状況ではなく、何かを落とさないようにするのに精いっぱいです。でも一人でなく専任師長に相談に行けるということで助けられています。

改めて管理の仕事というのは思ったより時間を使うことがわかってきました。決済の書類が多いな（笑）とも感じています。書類の処理ひとつから、支援してもらえる体制があるので、ストレスを上手に発散させながら、早く自律できるようにしていきたいと思っています。

患者さんのなかには30年の透析歴という方もいて、合併症も抱えています。また高齢で透析導入される方も増えて介護面も考えなくてはなりません。こうした現状に合わせケアの方法も変わってきていますが、患者さんも私たちも楽しくなる知恵や工夫を皆で出し合っています。

専任師長が、辛いこと、苦しいことを楽しいことに転換してやっていこうというという職場風土をつくってきたわけです。

大切にしていきたいと思っています」

医療、安全対策活動について

専任主任
久保田　万知子 さん

「医療安全対策委員会の活動を紹介します。この委員会は医療事故を未然に防ぐことを目的に立ちあげられました。さまざまな事故が想定できますが、知識として知っているだけでは事故が発生した場合、的確に対処できない可能性もあります。

空気混入・脱血事故を取り上げて、食紅で模擬の血液をつくって事故を再現して、皆さんに擬似体験してもらったこともあります。

わぁーと驚きの声が上がって迫力満点でしたが、事前の安全チェックの大切さや出血があっても慌てないということにつながる学習になりました。KYT（危険予知トレーニング）学習はリスク感性を育てる教育として重要だと思います。【写真】

また金山クリニックでは2001年頃から『患者さんと共に立てる看護計画』を実施しています。

それ以前は看護側の立てた計画に沿って患者さんが自己管理をしていくというのが看護計画の普通の姿でした。しかし、一定の決められた数値目標を患者さんの自己管理の目標にすると、目標どおりいかなかった場合、患者さんは看護師から指摘されて、それが度重なるとストレスになる面もあったのです。そうした反省から、患者さん個々の事情を組み込んだ計画にし、納得してやれる範囲の看護計画に変えていきました」

機関誌とフットケアで患者と触れ合い

看護主任
伊井　たか子 さん

「私は患者さん向けに発行している機関誌の編集を初めて手がけました。1998年のことです。患者さんとのコミュニケーションを深めていくうえで、機関誌を発行してほしいと師長より依頼され、年4回『四季』という名称で発行し始めました。【写真】

当初はワープロで発行していましたが、途中からパソコンに変わりました。しかし、カラープリンターも今のように性能がよくなかったので、1枚プリントするのに3分かかり、2日がかりでした（笑）。患者さんに知ってもらいたいと金山クリニックのことや自己管理についての記事が中心でした。ほとんど時間外のボランティアでしたね（笑）。その後、患者サービス委員会が立ち上がって、編集方針も患者さんと共にという姿勢で患者さんからの記事も載せるようになり、『いこいの広場』と名称も変更し、現在も発行が続いています。

今は、フットケアプロジェクトを立ち上げ、患者さん全員のフットチェックおよびフットケアをしています。以前から糖尿病患者さんのフットケアをしていましたが、透析患者さんの長期化、高齢化によって閉塞性動脈硬化症の患者さんが出始めましたので、異常の早期発見に努め、患者さんに説明するために足や爪の模型を手づくりしたり、足病変のパンフレットをつくって配ったりと日々努力しています。以前は足など見せたくないとか、汚いからといっていた患者さんも積極的に足を見せてくれるようになりました。

また看護側も患者さんの頑張っていることが理解でき、柔軟な姿勢がとれるようになったと思います」

名古屋記念財団
金山クリニック

COMMENT

スタッフ総動員の防災ビデオ

看護主任
吉田　佳代 さん

「私は防災委員会で、参加型の防災訓練などをやってきました。災害には停電が付き物ですが、停電になったときの対処も訓練しています。【写真】月に1回、実際に電源を落としてバッテリーの切り替え訓練を行っています。バッテリーの使用などの負担がかかりますが、毎月繰り返すことで、万が一災害が発生した場合にも適切な行動がとれるようになると考えています。

患者さんに火事で煙が出た場合どうなるかを体験してもらったこともあります。

また患者さんに積極的な参加を促すために、防災ビデオもつくりました。

患者さんへの状況に応じた対応や避難方法、避難経路の案内などをまとめたものです。

金山クリニックのスタッフ総動員で撮影をしたり、登場人物になったり、ナレーションを入れたり手づくり感いっぱいのものです（笑）。

災害伝言ダイヤルを患者さんに体験してもらう訓練も毎月実施しています。

最初は高齢の患者さんはできないといっていましたが、最近は説明の仕方について良し悪しを指摘されたりしています（笑）」

患者さんの話を聞くことから

看護主任
山内　要 さん

「透析医療に携わって14年になります。その前も看護の仕事でしたが、入職して感じたのは、透析医療の難しさです。とくに患者さんとコミュニケーションをとる時間が長いことによる、患者さんとの人間関係づくりです。この辺の感じは今も同じです。それに機器の操作も伴います。このように他の領域の看護師より看護のスキルが多方面にわたっています。しかし、そうした感じを持ちながらも今までやってこられたのは、その時々に続ける気持ちになれた出会いや何かがあったからだと思います。とりわけ最初の3年間くらいは透析医療に関する知識も技術も少なく、自信が持てませんでした。

そんなとき、患者さんの書いた『夜の透析室から』という本を読んだのです。この本のなかには、患者さんの透析に対する気持ちやナースに対する思い、腎臓移植に対する葛藤などが書かれていました。それまで患者さんに対し自分が思っていたことや感じていたことと、本に書かれていた患者さんの人間像とに差があることに気づきました。このことをきっかけに、患者さんを理解することによって、透析看護にもやりがいが出てくるということに気がつきました。そして、患者さんに直接話をしてもらい、聞く機会をつくることにしました。それが教育委員会で実施している『患者さんの語りから学ぶ学習会』です」【写真】

患者さん一人ひとりに書いたXmasカード

看護主任
藤澤　京子 さん

「患者サービス委員会をやっています。金山クリニックは今年、設立30周年を迎えたのですが、機関誌『いこいの広場』の30周年記念号の編集や透析室の入り口に飾り付けをしたりしました。また、恒例の七夕やクリスマスには、それぞれ笹を用意して飾り付けをしたり、クリスマスツリーを飾り付けたりしています。昨年のクリスマスには、看護師全員でそれぞれの受け持ちの患者さんに宛ててクリスマスカードをを手渡しました。【写真】患者さんやそのご家族にたいへん喜ばれました。

私と透析医療との関わりは24年になります。金山クリニックでの勤務は6年になります。

患者さんとの関わりも長いものになりますが、なにより患者さんが週3回透析のために通院を続けているという事実に驚嘆します。私たちは自分の体調が悪ければ休むこともできますが、患者さんは例え体調が悪くても透析のために来なければなりません。そういうことを考えると、ここに来て透析をする4時間が、患者さんにとって少しでも快適な時間であってほしいと思います。そのためできるだけのことをしようと心がけています」

患者さんの疑似体験で学ぶもの

看護副主任
田中　希 さん

「教育委員会に所属しています。教育委員会では患者さんの話を聞く機会を設けるとともに、体験的に患者さんの置かれている状況を理解してもらう活動をしています。

患者さんの疑似体験は、看護スタッフに患者さん役になってもらい、透析ベッドで腕に疑似針を付けて4時間透析をしているのと同様な時間を過ごしてもらいます。【写真】トイレに行きたいときも針を付けたままで移動し、食事もベッドでしてもらいます。その間、透析室の看護師は患者さん役に対し、他の透析患者さんと同様に接するというものです。

この患者さんの疑似体験には患者さんと似た体験をすることで、4時間透析ベッドに拘束されている苦痛を理解してもらい、それを患者さんへの理解や自分の看護を振り返る機会にしてもらいたいという意図があります。

透析医療には看護学校時代から慢性疾患の看護に関心があったことで、他の慢性疾患看護の現場を経験し、慢性疾患をより深く学びたいということで透析医療に携わることにしました。6年になりますが、先輩たちに教えられたり、研究発表や執筆の機会をいただけたりいろいろな学びのあった内容の濃い年月でした」

個々の患者さんデータが生きてくる

臨床工学技士
統括科長
森實　篤司 さん

「私はHOSPYグループの新生会第一病院、各サテライトを統括しています。HOSPYグループは透析患者が1,000名以上在籍していますが、例えば貧血評価としてエリスロポエチン、ヘモグロビン、フェリチンの変化をグラフ化したシステムなど多数の患者を個々に管理するためにはコンピュータなどによる一元管理が必要不可欠です。当グループの透析業務で使用している透析支援システムは、臨床工学部で構築したものを利用し、必要性があれば自分たちの現場に即したシステムを構築しています。今後臨床工学部として患者状態を個々に把握し、特に基礎体重の設定やバスキュラーアクセスの管理などでも力を発揮できる場面を増やせればと考えます。

現在の大きなテーマは透析液の清浄化加算が認められたことにより、より清浄化を進める必要性に迫られ、さらに清浄化された透析液を利用した透析機器の自動化も登場することにより、自動化の導入による効果を、今後どのようなかたちで患者サービスの向上に結びつけるかを、時系列で組み立てる必要があると考えています」

透析液清浄化がますます重要に

臨床工学技士
主任
伊藤　靖 さん

「金山クリニック臨床工学部主任の伊藤靖と申します。以前は同グループ内の東海クリニックで勤務していましたが、金山クリニックに赴任してはや4年が過ぎようとしています。自分が透析医療に携わって約10年になりますが、当時と比べると現在では、使用している機械やダイアライザ、モニタリング機器の性能は飛躍的に向上し、透析医療は非常に進歩していることを現場で働きながら身を持って感じています。

現在の透析分野では患者さんの高齢化や合併症の多様化が進んでおり、透析予後やQOL向上のためにも適正体重の設定や管理は重要ですが、その適正体重の設定には苦慮する場面も多く、常に変動する適正体重を的確に評価することは容易ではありません。そこで現在では、多周波数生体電気インピーダンス法による体水分量測定を定期的に行うことで、従来からの適正体重設定に用いられる心胸比測定や他の評価法と併せて総合的に判断することで、より詳細な適正体重設定に努めています。

また、定期の検査が終了したあと、臨床工学部で独自に開発したシステムによってインピーダンスの情報だけでなく、患者さん個々の採血データや検査データを1枚のレポートに表記することで、より分かり易く、効果的に体水分量評価が可能となりました。そしてその結果を医師や看護師だけでなく患者さんにも情報を提供・共有し、チーム医療の一員としてどのようにしたら安定した治療を患者さんに提供できるのか、毎日試行錯誤しています」

COMMENT